

震災特集1

各支部だより

3・11以降、相双地区の各支部は活動を休止せざるを得ない状況となりましたが、小高支部長と原町支部長から近況や震災後に想うことなどを寄せいただきました。また、東京支部からは総会の様子、募金活動の経緯についてもご寄稿いただきました。東京支部の募金額は四百万円。同窓会ばかりでなく生徒会にもご寄付を頂き、両会とも円滑な活動が進められています。

近況と同窓会小高支部

丁度一年前、三月十一日十四時四十六分の大地震と大津波により犠牲になられた多くの方々、住家をなくされた方々に対し、心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。私は小高区住人で、三月十一日の大地震を自宅書斎にて目のあたり屋根瓦が波打ち落下する様を目撃しました。隣近所に住む方達にも怪我がなかったのが幸いだった。家周辺には見たところ、被害は見られなかったが、居室内部は、目もあてられない程の状態だった。三月十二日から津島一泊、鹿島区二泊、福島三中五泊、二本松市内体育館に七月十八日までと、四ヶ所を巡り、最終的には市内の若宮借上げ住宅に落ち着き現在に至っています。次に、五人家族が三ヶ所に分散したのは淋しい限りであった。願うのは、一日も早く古里に戻り、小高区並びに南相馬市の復興のため、孫や若者が喜んで戻ってこられるよう、微力ながらお手伝いさせて頂きたいと考えている。同窓会小高支部の活動は、

東京支部募金活動

三・一一、その時は私は車の中。信号停止中、携帯の緊急地震情報鳴る。自宅まで二〇〇mだ。青信号で走り出すとすぐ大きい震れ。アララ、何だこれは！と同乗者、家並が、電柱が、道路が、人が飛び出す。五〜一〇分、徐行二波の震れ。家の前で三度目の大震れだ。吾が家の空車が踊り出す。これが関東大震災の再来か？大変なことだ。これがニュースでは東北地方、特に太平洋側の被害甚大、更に津波が追討ちを掛けている。親兄弟への連絡不能。それに原発事故発生で避難へと追い立てられていると云う

東京支部総会 頑張ろう！相馬

小春日和って、こんな日というのではなかったらうか。平成二十三年十一月十三日、日曜日。その日は朝からよく晴れた暖かな一日であった。原高同窓会東京支部の集いが正午から開かれる。こちらは上野公園内の精養軒である。同じ園内にある東京国立博物館の平成館では、特別展「法然と親鸞」が開催されていた。この日で前期展示の京都・知恩院蔵「国宝・早来迎」が替わるといので、私は十時に入

新規巻き直し、本同窓会事業で進行中の市内各小学校単位にまとめる名簿が完成したら支部総会を開き、活動を再開したい。然る後、今年同窓会入会者を両手を広げお迎えし、益々活気あふれる原町高同窓会の発展に寄与したい。会員各位の健康と、ご協力を切に願う次第です。小高支部長 西内 眞介(相商第六回卒)

のだ。すく何かをしなければ、行動を起さねばと思いつつ身内の安否へ時を過す結果に。一週間程で何とか確認は出来た。幸いと云うか私の親族友人に犠牲者無し。再び何かしなければ、特に林事務局長と義援金募集へと走り出す。マスコミはその方法を報ずると共に配分の不備を訴える姿に我々は同窓会の連絡網で母校へ後輩へと目を向けた。南相馬市へ原高へでは何かと制約があると聞き知り同窓会の支部から本部、後輩のために支援の形を探りました。反対、苦情、税控除等の不満もありましたが、そう云う意味で突っ走っていた。私は友人知人にも声掛け協力を得た。支援者五六五名(内、四

館する。日曜とあってか、早くも大勢の人々が押しかけていた。数多く出品された墨字、絵入りの「伝統」は展示が低く、眼を落として見なくてはならず、それだけに人々のお動きは遅々として進まない。出口間際で、目的の早来迎園にやっとう。 両僧が生きた平安末期から鎌倉時代にかけての悲惨と東日本震災を比較しようとは思われない。しかし、この十三日の新聞報道の写真には驚く。爆発した原子炉建屋が前日、初めて報道陣に公開されたのだ。写真に見るその無残な姿、まさに廃墟に心が痛む。現代ならではの光景といえよう。 時刻は十一時ちよつと過ぎ。ぶらり十五分も歩いたが、精養軒に着く。開会までまだ十分ほどあるというのに三階会場・桜の間はすでに八分の入り。 先にテーブルにきていた同クラスの友に挨拶し、ホール内に展示されていた震災写真コーナーへ。 写真は地区別に分けてある。私の出身地は鹿島区、その昔は真野川の南側に海から細長く横たわる真野村であった。鹿島区のパネルのところ、JR常磐線の東に沿って走る国道近くか、津波に打ち上げられた漁船が折り重なる光景の壮絶さに一瞬息をのむ。多分、あの少年のころに、こわごとと泳いだ鳥浜あたりの船か。 会場には十人がけの円テーブルが十七〜八卓ある。二百名近くが集まったのだ。前年の百二十名ほどに比べ、この盛況は震災復興願望への表れか。 十二時、高屋敷氏の司会により、園内寛永寺の正午の鐘の音に合わせ「東日本大震災で亡くなられた方への黙祷」で会が始まる。古室支部長、渡辺同窓会長、八巻校長の挨拶ののち、特別にいられた桜井南相馬市長が作業衣姿で登場する。市長の力強い復興への意欲が、同窓生一同の心を揺るがす。 宴たけなわのころ、浪江町



校歌を歌う参加者

震災について想う

三年生の皆様、ご卒業御芽出度う御座居ます。 昨年は一千年に一度という大地震、いまだ経験のない大津波、そして安全だった筈の原発の爆発という大変な災害にあい、尊い大事な、大切な生命が自分の回りから失われていきました。今迄の幸せな家庭、近所の景色、親しかった友人、全てが一変してしまいました。でも貴方(女)は、

今生きています。それはこのように状況の中でも生きて成長していくその中の一人に選ばれたのだと思います。この大災害の中で生きて行く事は大変な事だと思えますが、今の困難を乗り越え、震災前と違って、大きな日本を創り上げていく生命だと思えます。一人の力では出来ない事も各々の「絆」を大切に繋ぎ合わせ、広げて、この変わり果てた故郷を、今までの以上の故郷に!!そして日本を創り上げて行って欲しいと思いま

出身、民謡界の至宝である原田直之さんの相馬民謡が披露される。唄に合わせ全員が手拍子。元気をもらったのはいうまでもない。 今回は関東地区に避難する約十五人が招待されたが、その中に、同クラスの友人がいた。原町区の住まい。移転先を転々、いま六か所目の東京・池袋にいますという。東京には約九〇〇〇人が避難中、彼はその中の一人なのだ。互いに、ふるさとへの郷愁やまず、であった。 この日、小春日和を味わった人はどれだけいただろうか。一日も早くすべての人々が味わってほしい日でもあった。 但野 廣(第四回卒)

す。「淡路大震災」新潟の「中越地震」等々、全て復活しています。私達の違う所は原発の爆発による「放射能汚染」が加わっています。でも、他所の地区の人達は全て復活しています。ここに居る私達だけが出来ないことはない。何年かかろうとも必ず復活して見せる、一人一人が手を取り合って「絆」を結んで必ず必ず!!! 原町支部長 荒 忠敬(第十三回卒)

震災特集3

原町高校 震災ドキュメント

3・11 巨大地震発生。生徒は授業中で、揺れが収まった後、校庭へ避難。津波被害を受けた生徒、双葉郡の生徒の多くが自宅へ戻れず二十数名が柏曜会館に宿泊した。格技場には一般の避難の方も宿泊。夜には、第二体育館が遺体安置所となる。 3・12 帰宅困難生徒七名が市の避難所へ移る。柏曜会館は警察の待機所になった。第二体育館に遺体を搬送する車両、遺体確認に来た方の車両で校地内は混雑。 3・14 出勤可能な職員十数名が集まり会議を行うが、原発事故により職員も自宅待機となる。避難所に残っていた五名の生徒は、職員が家族のもとへ送り届ける。 3・15 福島第一原子力発電所20、30km圏に屋内退避の指示が出る(原町高校も同圏内)。 3・22 高校入試合格発表。この頃から、学校再開の時期や転学に関する多数の問い合わせが学校に寄せられる。 4・4 震災後初の全職員による会議が開催される。 4・5 学校再開に向けたサテライト校および転学に関する県の方針が発表される。 4・9 県内五か所で転学・サテライト校に関する説明会が開催される。(10) 4・18 転学希望、サテライト希望受付締め切り。原町高校は相双と県北のみでサテライト校を開校することになる。 4・22 各校で転学試験が実施される。原町区・小高区



崩落した体育館外壁



体育館に自衛隊の拠点



バスを降りて相馬高校へ



仮設校舎

の小中学校は、鹿島区の小中学校等で授業開始。また「屋内退避区域」が緊急時避難準備区域となる。 4月下旬 自衛隊が柏曜会館、第一体育館等を拠点として沿岸部の復旧作業に当たる。(6月) 5・9 相馬高校と福島西高校の教室を借り、原町高校サテライト校として授業開始。相馬サテライト校の通学者の多くは、県教委が準備したバスを利用しての登下校となる。相馬二八七名、県北五四名。 7・15 両サテライト校の合同行事、野球応援が行われる。試合は七対〇の完勝。 8・18 二期開始。相馬サテライトの一年生は旧相馬女子高校校庭に完成した仮設校舎へ移る。 9・2 相馬サテライトでレクリエーション開催予定だったが、雨天のため仙台方面へ遠足。 9・5 福島市国体記念体育館で、両サテライト合同の原高祭開催される。バスケットボール、バレーボールに汗を流した後、吹奏楽部の演奏